

極短プローブなど好調

量子分野への提案も強化

高い技術力を武器に、評価・開発用ソケットを軸に存在感を発揮する国内有数のソケットメーカー。主力の半導体用ソケットに加え、近年はプローブを用いたユニット・モジュール製品などの「プローブ応用製品」と呼ぶ領域での事業展開にも力を入れている。

0.35mmピッチに対応した極短プローブ



25年6月期売上高は前期比横ばいを予想する。業績の downstairs となっているのが、プローブ応用製品だ。その一つである測定器分野では、顧客側での事業拡大も相まって旺盛な需要が続いている。高速メモリーなどの検査・測定では従来、同軸ケーブルが担うケースが多かったが、高周波化の進展に伴い、これをプローブに置き換える動きが出てきている。同社ではこうしたニーズに対応すべく、極短プローブの提案を強化。計測／通信分野では高いGHzレベルでの伝送路接続

が重要で、整合されたインピーダンス特性では低背プローブ接続が求められている。同社のプローブは0.35mmピッチ、60GHzを超え、5mmのテストハイトで、0.35mmピッチ、60GHzを超える伝送特性を実現する。新たな試みとして、MEMSプローブカード向けのクリーナー分野にも参入した。米国に本社を置くパルフォン (Palphon Co., Pa.) の日本国内代理店として、エラストマータイプのプローブカード用研磨／クリーニング製品を展開。主要プローブメーカーからの認定も取得しており、さら

なる飛躍に期待を寄せる。近年、取り組みを強化している量子コンピュータ向けでも業績貢献が始まっている。量子コンピュータは極低温環境での動作が求められるなど、ICソケットに求められる要求も非常に特異かつ高度なものであり、同社の技術力を活かせる分野であるという。

同社では、17年4月にプローブ製造および切削加工を手がける九戸精密(株)（岩手県九戸郡）を子会社化。プローブ製造からの一貫した事業体制を確立し、自社ソケット製品のほか、外部顧客のプローブピン製造を請け負っている。

150万ピン／週の生産体制を構築しているものの、足元では汎用データセンター投資の低迷を受けて、事業低迷を余儀なくされている。底打ったものの、今後は顧客カバレッジの拡大が必要との認識でバランスの取れた事業体制への移行を目指す。

九戸精密ではシチズンフアインデバイス時代から培ってきた精密加工技術と、自前でのエンジニアリング能力を駆使して、一部設備の内製化にも取り組んでいる。その一環として、新しい自動組立装置の開発を23年から開始。TAT短縮につなげ、需要回復期に備えた体制づくりも鋭意進めている。

